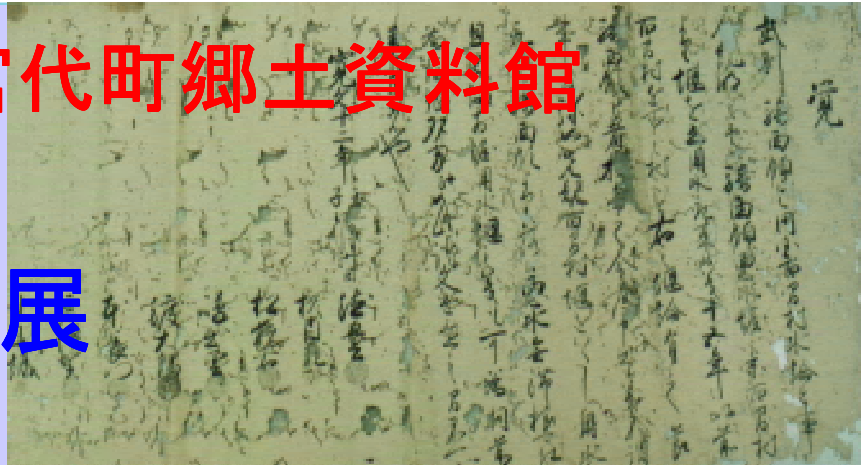


宮代町郷土資料館

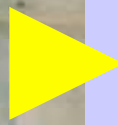
企画展



# The 笠原沼

～笠原沼の開発とその歴史～

2 / 9



4 / 2



## 郷土史講座

第1回 2月13日(日) 14時▶

「井沢弥惣兵衛と見沼代用水」

講師 埼玉県立文書館元館長秋葉一男氏

第2回 2月19日(土) 14時▶

「笠原沼新田の開発」

講師 宮代町史編集委員 林貴史氏

第3回 2月27日(日) 8時▶

「見沼代用水を巡るバスツアー」

第4回 3月5日(日) 14時▶

「笠原沼田んぼの暮らし」

講師 宮代町史調査員 堀江清隆氏

第5回 3月12日(日) 9時▶

「笠原沼を巡るバスツアー」

南埼玉郡宮代町字西原 289

0480-34-8882



## 開催にあたって

私たちの町、宮代町は東京近郊にもかかわらず、比較的緑豊かな町といえます。そしてその中心ともいえる田んぼは、平成2年の統計で耕地全体の約80%をも占め、稲作地帯と思いがちですが、江戸時代中期の百間村では耕地面積の約20%に過ぎません。その後、笠原沼新田などが開発され、明治時代初頭では約24%に増加しました。

このように、本来、畑作地帯であった宮代町で資料に残る初めての大規模な開発が、笠原沼の新田開発です。宮代町にとって象徴的な存在



現在の笠原沼田んぼ

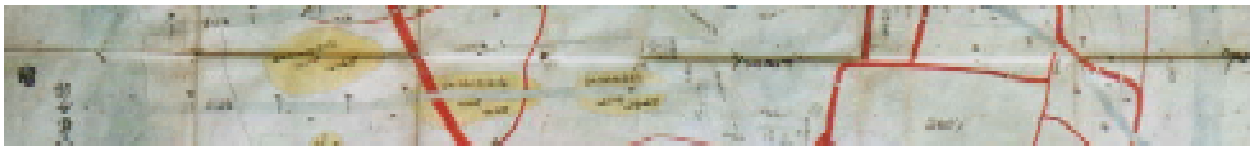
といえるこの笠原沼田んぼは、東武動物公園の建設などで多くが失われましたが、今わずかに残ったホツケ田んぼやその周辺の平地林（山崎山）を整備し、農と住民の新しい交流の場を目指し、「新しい村」の建設を進めております。

今回の展示では、宮代町の象徴的存在である「笠原沼田んぼ」をメインに開発以前の笠原沼をめぐる水争いや笠原沼新田の開発、笠原沼たんぼの暮らしを、宮代町に残る古文書や絵図、民具などから復元し、江戸時代の笠原沼新田の開発の様子を中心に紹介いたします。

最後になりましたが、企画展示開催にあたり快く資料をご提供いただきました皆様、並びにご指導、ご協力いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

## 凡例

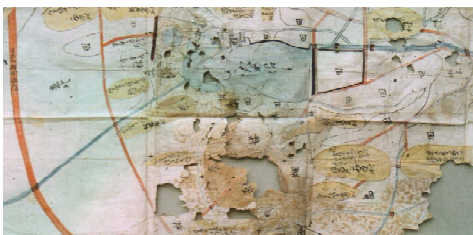
- 1 本書は平成12年2月9日から4月2日にかけて開催する宮代町郷土資料館企画展「The 笠原沼～笠原沼の開発とその歴史」の展示解説図録です。
- 2 本書並びに展示した写真は、一部の借用資料を除き当館学芸員河井伸一が撮影しました。
- 3 本展示の企画構成並びに本書の執筆及び編集は河井伸一が行い、展示は資料館職員等が協力し行いました。なお、模型の製作は松本摩美を中心に遺物整理作業員が、復元図の作成は今村佐和子が行いました。
- 4 資料提供・協力者一覧（敬称略）  
埼玉県立博物館、八潮市立資料館、宮代町税務課、宮代町農政商工課、株式会社愛植物設計事務所、青木佐太、青木千代子、秋葉一男、岩崎光子、海老原正一郎、岡安邦彦、折原静佑、加藤寿郎、杉山ろく、戸田義一、戸田ふく、中村ケエコ、中村忠男、林貴史、堀江清隆、森田留吉、森近司



## 笠原沼をめぐる水争い

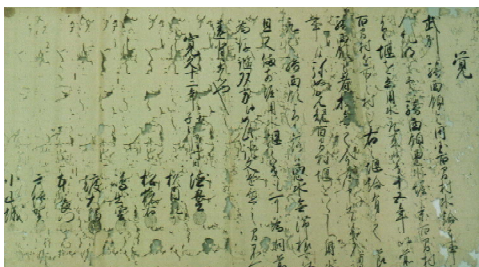
埼玉県東部地域は、江戸時代初期（1610年頃）に関東郡代伊奈氏により関東流という手法で、上と下に土手を造り、その下流域である地域の新田開発を行いました。一方、笠原沼でも、1625年頃、大河内金兵衛久綱により金兵衛堀（爪田谷落堀）が掘られ、上郷（爪田谷村・野田村などの騎西領）の排水を落とし込んだことや姫宮落堀に恒常的な堰を造ったことにより、下流域の田んぼの用水源とされ、新田開発が行われたと推定されます。こうして、笠原沼は上郷の排水を溜め、下郷（百間村）の用水として利用する役割となったことで、度々水争いが起こるようになります。それは、上郷では、不用な水を笠原沼に流し込みますが、下郷では、その排水路に堰を設け水位を上げ用水として利用していたため、排水路が逆流し上郷の田んぼの水が溢れてしまったからです。

古文書で確認できる最初の水争いは万治元年（1658）頃で姫宮落堀に設けられた2ヶ所の用水堰の件で百間村と近所の村が水争いをしたことが「ため沼絵図」から伺われます。その後、寛文12年（1672）には百間村と騎西領とが、元禄6年（1693）には西原村・西村・東村・道仏村と久米原村・須賀村・爪田ヶ谷村との争いが起こりました。さらに、正徳3年（1713）・正徳5年（1715）には、野牛高岩落堀が掘られたことによる須賀村・蓮谷村などの沼廻りの村と沼の水を用水として利用している下流域の村（道仏村など）との争い、享保7年（1722）には地先の開発にかかる旗本永井氏の須賀村と天領及び旗本池田氏の須賀村との争い、同年には道仏村・東村・西村・百間村と久米原村・爪田谷村との用水堰をめぐる争いや道仏村と蓮谷村との眞菰刈り取りの争いなど度重なる笠原沼をめぐる水争いが起こりました。こうした、水争いは水田を耕作する上で、いかに水の普請が重要であったかを伺わせます。



ため沼絵図（万治元年頃）

この絵図は記載されている領主等や寛文の裁許状との関係から万治元年（1658）頃の百間村と近所の村との水争いに関する絵図であると推定されます。笠原沼が「ため沼」と記載されていたり、上の土手、下の土手や姫宮堀に掛かる堰が2箇所描かれていることも興味深いといえます。おそらく、姫宮堀に掛かる2箇所の堰のことで笠原沼の水を用水として利用していた百間村を笠原沼周辺の須賀村や久米原村などが訴えたものと推定されます。



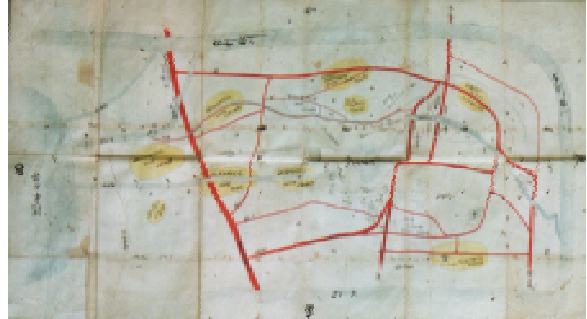
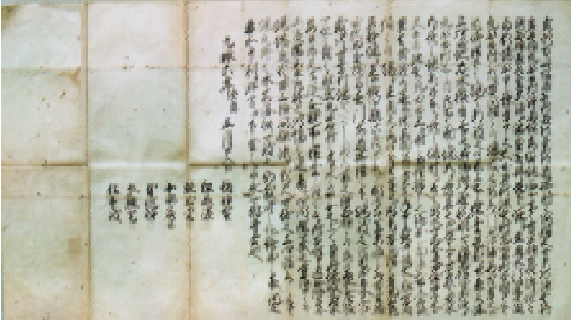
武州騎西領と同国百間村水論之事令旨  
明之處騎西領悪水堀之末百間村より堰  
を立用水取来候義十五年以前百間村近  
所之村々之堰論有之騎西領之者  
構無之今度申出候義不謂事一候弥如先  
規百間村堰をいたし用水取之騎西領よ  
り落候悪水無滞様可仕候旨又備前堀用  
水堰之義も可為同前為後鑑双方江如此  
證文遺置之間不可違背者也  
寛文十二年壬子四月六日  
徳五兵衛 印  
杉内蔵 印  
松猪石 印  
嶋出雲 印  
渡大隅 印  
本長門 印  
戸伊賀 印  
小山城 印

### 騎西領と百間村水論裁許状（寛文12年）

寛文12年（1672）の騎西領と百間村の水争いの裁許状です。この古文書には15年前の万治元年（1658）頃の百間村と近所の村との水争いについても記されています。この時の関係する絵図が「ため沼絵図」です。寛文12年の水争いの裁判結果は、従来通り百間村は堰を設け用水を引くことが認められましたが、騎西領から落とされた水が滞ることのないようにとの注文もつきました。また、備前堀用水堰についても同様であると記されています。



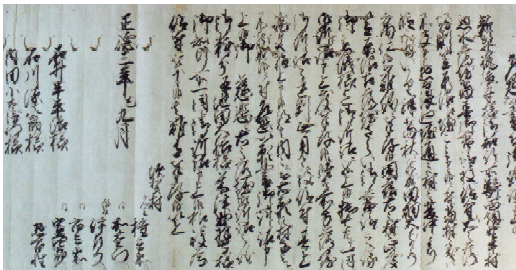
### ■ 騎西領落堀堰論裁許状 (元禄6年)



元禄6年(1693)に百間領西原村・西村・東村・道仏村と久米原村・須賀村・爪田谷村との水争いの裁許状です。当時、笠原沼は騎西領落堀(金兵衛堀・爪田谷落堀)が流れ込んでおり、笠原沼下流域の村々の用水を引く溜め池の役割を担っていました。そのため沼をめくり上流域の村と下流域の村とで度々争論が起きました。今回の争論は西原村などが道仏橋下に堰を造ったため、笠原沼の水位が上がり久米原村などの田んぼに水が逆流し稲が収穫できなくなったため起りました。

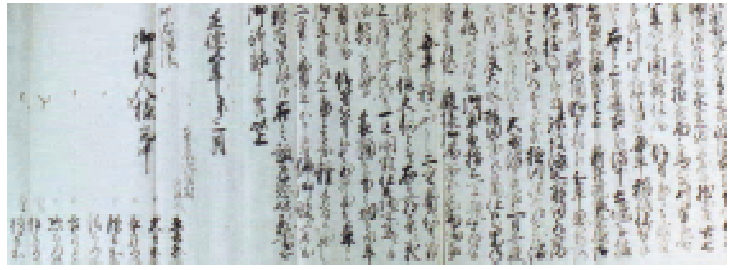
西原村をはじめとする下流域の村々は、昔から、笠原沼から流れ出る姫宮落堀の道仏橋下に堰を造り田んぼに用水を引いていたと訴えましたが、久米原村をはじめ上流域の村々は、騎西領落堀の末にも用水があるため、新たな堰は認められないと訴えました。幕府の裁判の結果、寛文の裁許状に記されている爪田谷村末に用水が無いことから、道仏橋下に堰を造り用水を引くことは当然であると認定しました。しかし、橋台については、寛文の裁許状で記してある通り、上流の村が満水であるときは堰を取り払い水を溜めないようにしなければならないため、これを取り除き、川幅の通り堰の長さを4間、沼口から堰の場所まで230間を深さ2尺で掘るようにと求められました。

### ■ 笠原沼古堀堀浚願 (正徳3年)



新井白石により菖蒲新田が開発されたことにより野牛村悪水落堀(野牛高岩落堀)が笠原沼に流れ込みました。このため、笠原沼の水が増え周辺の村の田んぼが水没したことにより笠原沼古堀落の堀浚いをめぐる訴訟が起こされました。

### ■ 笠原沼蔦草植付願 (正徳5年)



笠原沼のまわりは、もともと田んぼでしたが、爪田谷落堀や道仏堰を造り、溜沼になった時に荒地となりました。その後、蔦(まこも)を植え、秣場(茅や芦を取る場所)に、そして、8年前に田んぼに開発されました。しかし、笠原沼は古くから下郷の用水として利用されてきたことや新井白石により野牛高岩落堀が開削され排水を笠原沼に流し込んだことにより、水が増え、蔦田(摘田)だけでなく、植田まで稲が根腐れになってしまいました。このため、8年前に開発した田んぼを蔦(まこも)原に戻して欲しいと願いました。

### ■ 用水溜沼論並沼内眞菰刈敷出入裁許状 (享保7年)

この文書は、笠原沼の下流域の道仏村などと笠原沼の周辺の村である爪田谷村などの水争いの裁許状(判決文)です。道仏村を始めとする村々の主張は、元禄の裁判の結果、道仏村の堰は幕府により認められましたが、34年以前の元禄3年(1690)に爪田谷・久米原の村民は勝手に笠原沼に眞菰などを植え出し、水が滞ったという理由で、道仏の堰を壊してしまいました。これにより、用水がなくなり困ったため、笠原沼へ植え出した眞菰や田んぼなどを取り除いてほしいと訴えました。

爪田谷村などの主張は、道仏の堰を恒常的な堰としてしまおうと沼の近隣の村だけでなく他の地区まで水害となってしまう、更に田んぼや眞菰を勝手に植え出したという道仏村などの主張は、34年以前に天領であった頃の検地帳にも流田と記載されていることから矛盾すると述べました。

道仏村と蓮谷村との眞菰の刈り取りの争いでは、蓮谷村の村民が笠原沼内に植えていた眞菰を道仏村の村民が刈ってしまったため起ったようです。

幕府の裁判の結果、検地帳に記載されていないすべての田んぼや眞菰などを取り潰し、用水が滞ることがないようにし、今後、笠原沼へ田畑は勿論、葭や眞菰も絶対植えてはいけないと決められました。



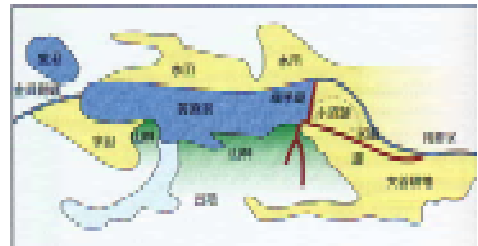
## 見沼代用水と笠原沼の開発

8代将軍徳川吉宗の時代になると米の増産政策の下に盛んに新田開発が行われるようになります。吉宗の紀州藩時代からの家来である井沢弥惣兵衛為永は、享保7年(1722)以降、笠原沼や見沼(浦和市)だけでなく飯沼(茨城県猿島郡)や手賀沼(千葉県印旛郡)などでも盛んに新田開発を行いました。この頃、新田開発が行える土地は、すでに田んぼとなっていたため、その用水源である溜沼以外開発する場所はない状態でした。しかし、溜沼を開発することは下流域の田んぼの用水源を確保しなければならないため、利根川から見沼代用水などを引き、溜沼下流域の村の用水源としたのです。このように用水と排水を分離し新田開発を行う手法を紀州流と呼びます。

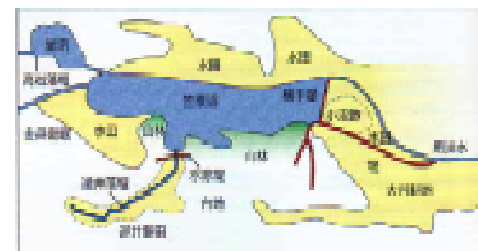
笠原沼の開発でも笠原沼下流域の村の用水源として見沼代用水からつながる笠原沼代用水により百間村などの田んぼに水がもたらされました。このことにより、溜沼の機能を失った笠原沼を開発することができたのです。

### 笠原沼新田の開発

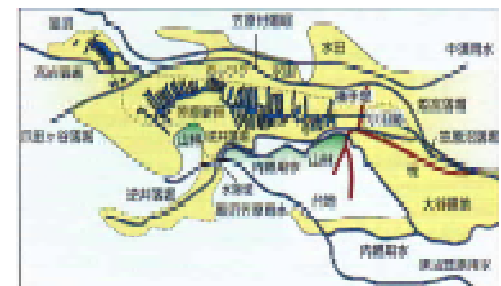
笠原沼は、百間・蓮谷・須賀・久米原・爪田ヶ谷などの村々に囲まれた東西約2km、南北約0.9kmの大きな沼でした。享保9年(1724)、南側の逆井新田が池田新兵衛により開発され、続いて享保13年(1728)井沢弥惣兵衛為永によって笠原沼の本格的な開発が始められました。まず、見沼代用水からつながる笠原沼代用水を掘り、笠原沼下流域の村々の用水源を確保しました。続いて沼の北側では、水除堤を造り、笠原沼へ流れ込んでいた爪田ヶ谷落堀や野牛高岩落堀を下流の姫宮落堀につなげるため笠原付廻堀を掘り、排水を古利根川に落としました。一方、沼の南側でも水除堤を造り、沼に流れ込んでいた逆井新田落堀を沼下へ導きました。こうして、上流からの排水を流れ込まなくし、さらに、沼の水を抜くため中水道を、その下流に笠原沼落堀を掘り、姫宮落堀に接続させました。しかし、姫宮落堀との合流地点で水が溢れてしまったため、享保14年、新たに新堀を造り直接古利根川に排水しました。これにより、百間西原組、百間西村、百間東村、百間中島村、蓮谷村、須賀村、爪田ヶ谷村、久米原村、須賀村定八、下野田村藤助の8村と2人により、笠原沼の新田開発を行いました。さらに、窪地であったため、串歯状に堀を掘り、その土をかさ上げすることで田んぼにしたのです。こうして、沼は192石余りの笠原沼新田として生まれ変わりました。



江戸時代前期の笠原沼(寛永年中)



江戸時代中期の笠原沼(享保9年)



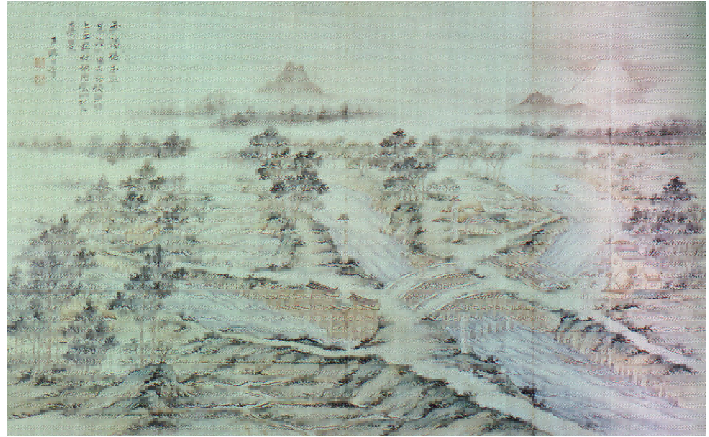
開発後の笠原沼新田(享保14年以降)



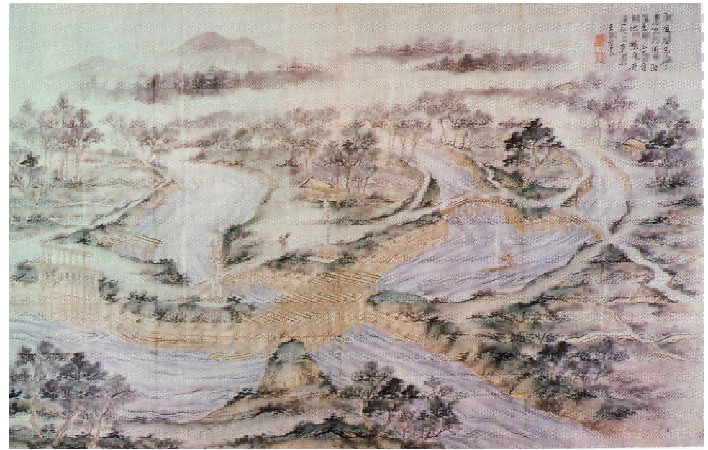
## 見沼代用水と笠原沼代用水

見沼溜井は元々は下流域の村々の用水源としての機能を持っていましたが、井沢弥惣兵衛為永により新田開発されることとなり、享保12年(1727)8月から9月にかけて見沼代用水の工事が始まりました。まず、下中条の利根川取入口から新たに新水路を掘り、荒木村で星川と合流させ、その流路を利用し、上大崎地内(菖蒲町)に八間堰・十六間堰を築きました。ここで、星川の本流と分岐させ、これより南は新たに新用水を掘りました。元荒川との交差点では柴山伏越を、綾瀬川との交差点では瓦葺掛渡井が構築され、見沼まで通水したのです。こうして、下流域の用水源を確保し、見沼は新田開発され、享保13年春にはすべての工事が終わったようです。

一方、黒沼笠原沼代用水(中島用水)は、享保13年に見沼代用水からの引入口として中島塚樋(菖蒲町)を造り、さらに、除堀堰枿(久喜市)で黒沼代用水と笠原沼代用水に分岐させました。笠原沼代用水は西条原村鎌塚谷で南北に分かれ、北側の中須用水は須賀村や蓮谷村・中島村の耕地を灌漑しました。南側の百間用水は、野牛高岩落堀との交差点で上野田伏越を、爪田ヶ谷落堀との交差点では上野田掛渡井が構築され、さらに、第六天堰で内郷用水を分派し、百間東村や百間中村・百間村の耕地を灌漑しました。



■ 柴山伏越絵図(埼玉県立博物館蔵)



■ 瓦葺掛渡井絵図(埼玉県立博物館蔵)



■ 用水悪水絵図



■ 掛渡井の図(算法地方大成巻4)



## 開発された笠原沼新田（47町1反5畝）

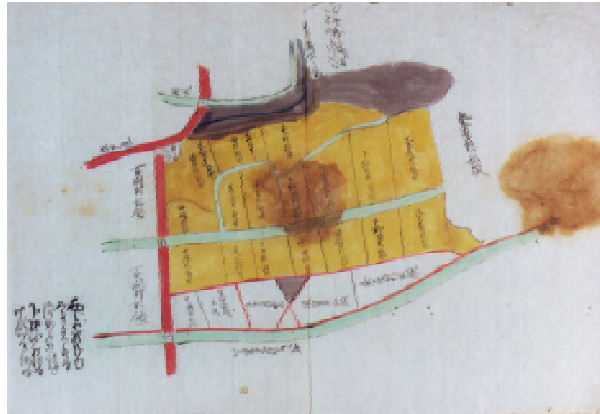
村名	石高	計画面積	検地面積
笠原沼久米原村新田	34石7升2合		4町3反7畝
笠原沼須賀村新田	45石2斗9升5合	7町3反9畝15歩	7町9畝24歩
笠原沼下野田村新田	16石5斗1升		2町2反8畝27歩
笠原沼中島村新田	22石4斗6升3合	3町5反8畝歩	2町6反7畝
笠原沼西村新田	11石3斗9升9合	5町2反3畝26歩	
笠原沼東村新田	29石1斗8升	8町2反8畝19歩	
笠原沼蓮谷村新田	11石9斗8升5合	2町7反1畝15歩	1町5反7畝15歩
笠原沼西原組新田	12石8斗5升2合	3町8畝歩	1町8反15歩
笠原沼爪田谷村新田	8石5斗4升8合		
合計	192石3斗0升4合		

\* 笠原沼須賀村新田の計画面積には須賀村定八請分は含まれていない。

\* 空欄は不明

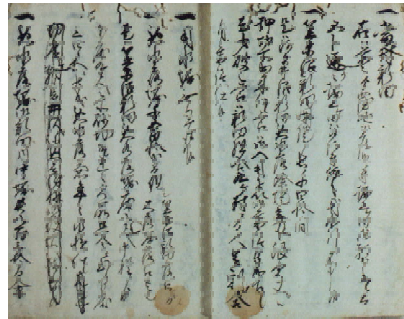
### 堀上田（新田面積における堀敷の面積）

笠原沼須賀村新田	45石2斗9升5合	7町9畝24歩（堀敷引3町5反4畝27歩）
笠原沼西原組新田	12石8斗5升2合	1町8反15歩（堀付年々不作引4反9畝3歩）



■ 笠原沼新田絵図

■ 笠原新田割境絵図（享保13年）



■ 笠原沼久米原村新田  
検地帳（享保19年）

■ 笠原沼中島村新田  
検地帳（享保19年）

■ 笠原沼須賀村新田明細帳（寛延2年）

享保19年(1734)笠原沼百間中島村新田や笠原沼久米原村新田で検地が行われ、笠原沼百間中島村新田で2町6反7畝が笠原沼久米原村新田で4町3反7畝が新たに田んぼとなりました。

この明細帳には、笠原沼新田は窪地のため、堀上田にしたいとの願いがあり面積の半分を掘り上げたと記載されています。このため、用水は引きませんでした。



## 用排水の管理と笠原沼田んぼの暮らし

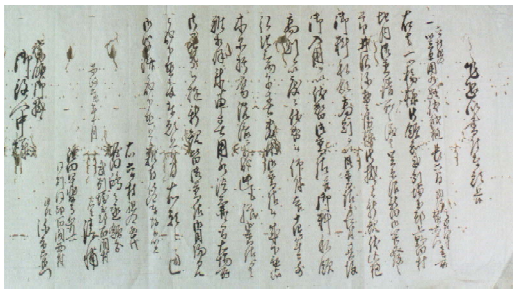
笠原沼田んぼやその下流域の田んぼに水を引くためには、笠原沼落堀や笠原沼代用水など用排水を管理しなければなりません。そのために、第六天埋樋、上野田掛渡井・伏越、笠原沼囲堤の普請や藻刈りを行うために村々が連合して管理する組合が作られていたのです。しかし、堰などをめぐるトラブルも多数起こっています。宝暦12年(1762)には百間村の住民が京塚橋用水堀を切り崩し、溢れた水を笠原沼に流し込んだことによる争論、明和5年(1768)には笠原沼中落堀、逆井新田落堀の件で七ヶ村丁場と四ヶ村丁場が定められた争論など挙げればきりがありません。また、堰樋や掛渡井などの構造物は少し壊れた時は村々の負担で、大きく壊れた時は幕府に願い出て工事を行いました。こうして、田んぼは守られてきたのです。なお、中水道の堰(横手堤の石橋)の管理は昭和50年代まで行われていました。



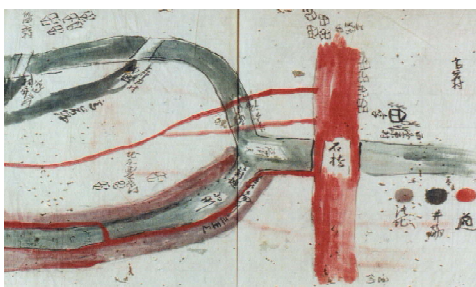
横手堤石橋の関柵跡(笠原沼落堀)

### 笠原用水路伏越樋伏替願(安政6年)

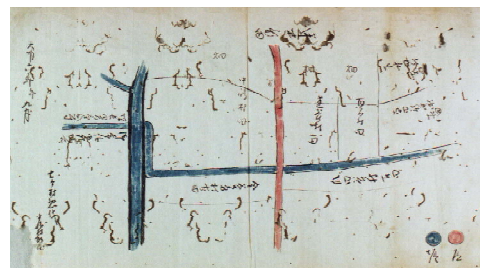
笠原沼用水路組合の6ヶ村は野牛高岩落堀と百間用水との交差点に造られた上野田伏越が朽ち果て壊れたため、幕府の役人に修復して欲しいと訴えました。



現在のの上野田伏越(白岡町大字上野田)



西条原分水堰絵図

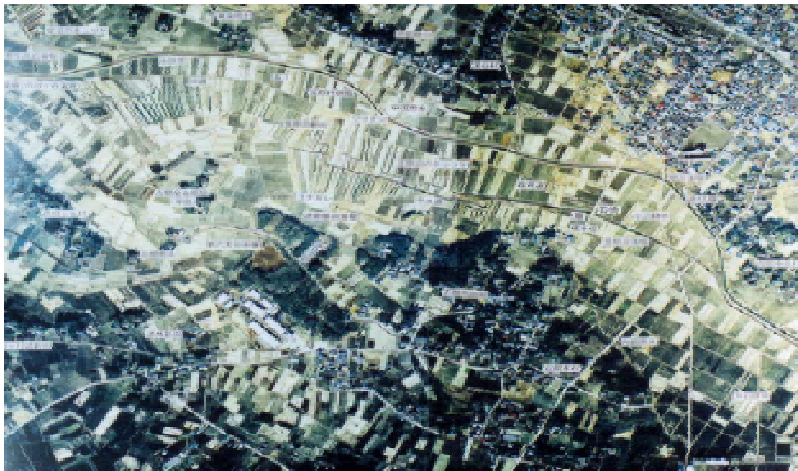


第六天埋樋普請願(天明6年)



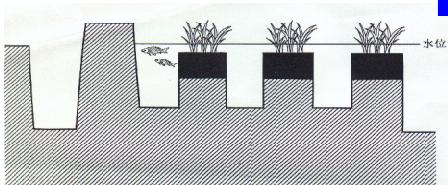


## 堀上田とは？

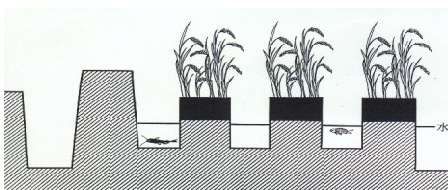


■ 笠原沼新田の堀上田 (航空写真)

一般的には堀上田と呼ばれる田んぼを宮代町内ではホツケと呼んでいます。これは、沼地や窪地など水がたまりやすい地域の水田開発や排水不良をおこしている水田の水腐れ等の被害を軽減させるためにつくられました。工法は、沼底を更に掘り込み、そこから出た土を周囲に盛り上げることで耕作面のかさ上げをしました。こうして、元々沼であった場所を田んぼに変えることができたのです。



■ 堀上田での作付け



■ 堀上田での刈り入れ

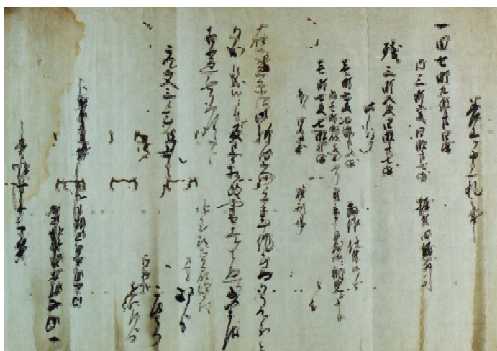
堀上田での作付けの方法は、まず、横手堤の石橋の所にある中水道の堰を閉めることで水位を上げ、水を溢れ出させ、田面に水を引き入れました。しかし、笠原沼田んぼの一番低い場所に水位を合わせるため、それより高い場所は用水から水を引きました。百間側では逆井新田落堀（メイセイボリ）から須賀や蓮谷、久米原側では中須用水から水を引いていたのです。刈り採る時には、中水道の堰を開け水位を下げ稲刈りをしました。

通常、中水道付近は土地が低いため水はけが悪いように思えますが堀があることで水はけが良く、かえって、土地が若干高い「五丁」という場所は、水はけが悪く二毛作に向いていなかったようです。



■ 地籍図 笠原耕地 百間7ヶ村分(明治10年)

笠原沼新田では道や堤敷、中水道などは検地の際、耕作地から除かれていましたが、串歯状の堀の部分（クリーク）は含まれており、年貢を払う際、「堀付田堀敷引」として除かれました。この堀付（ほりつけ）が変化しホツケになったと推定されます。



■ 笠原新田作付地届 (元文3年)

元文三年五月

差上ヶ申一札之事

一田七町九畝廿四歩

内三町五反四畝廿七歩

残三町五反四畝廿七歩

此分

老町七反七畝廿五歩 当仕付候分

内老町歩余水かふり用立申間敷様二相見江申候

老町七反七畝武歩

外二四反六歩 砂利場

右は笠原沼新田当年作付為御見分と御出被成候二付

反歩相改書上ヶ之通り少も相違無御座候、以上

埼玉郡百間領須か村

名主 政右衛門

同 庄右衛門

百姓代 吉左衛門



## 笠原沼田んぼの1年

6月になると田んぼの準備をはじめます。天保5年(1834)の笠原沼百間中島村新田では、旧暦の5月7日から植えだし、20日までに終えたことが記されています。昭和の初め頃では、まず横手堤の石橋にあった中水道(笠原沼落堀)の堰を閉め、水位が上がった所でシロカキやノロアゲを行います。田面に上がったノロは栄養分を多量に含んでいるため肥料としてまき他、クロツケ用の泥として利用しました。一般的な田んぼに比べ笠原沼田んぼではクロの幅が広いのが特徴で、クロには稲を2列交互に植えました。田面に稲を植えてから20日後位にタコスリを使い一番コスリを行います。その後二番コスリ、一番クサ、二番クサ、三番クサとタノクサトリ(田の草取り)を行います。そして、10月中頃中水道の堰板を外し、田面の水を抜き、11月頃までに刈り取りを終わります。当時は、二毛作を行っていたため、田んぼが終わると麦や菜種を植えました。麦は11月頃、麦まきを行い、麦フミや麦サクリを定期的に行い、6月頃刈り取りました。6月は麦の刈り取りと稲の田植えが重なり非常に忙しかったようです。

魚釣りは10月の終わり頃解禁となり、その時期になると近隣だけでなく東京からも釣り客がきました。その後は、四手網やツキヤス、カキサデなどで魚を捕ったり、ホッコミやキリコミで漁獵を行いました。

## 笠原沼田んぼでの漁獵～ホッコミとキリコミ～

笠原沼田んぼでは10月末頃から漁場になります。江戸時代ここで捕れる魚は貴重なタンパク源でした。ここでは、笠原沼田んぼで行われた漁獵について紹介します。

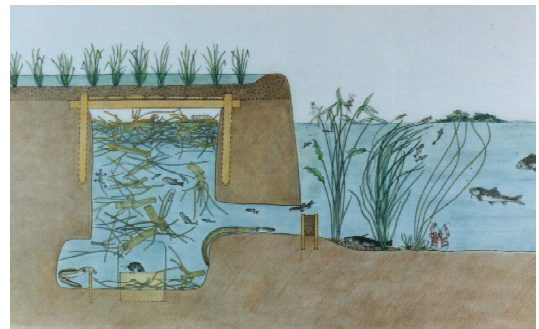
ホッコミはオトシ(笠原沼落堀・中水道)からトンネルでつながる深さ10尺(約3m)位の穴で、オトシより深く掘り込まれており、フナや雷魚、ウナギ、ナマズ、イモリ、エビなどが捕れました。穴はほぼ垂直に掘られ、最深部には巣穴(横穴)が三方に掘られていました。巣穴の入口部には10cmセンチ程度の板が備えられ、土の流入を防いでいたようです。巣穴や縦穴には魚がたくさん入るよう多量の枝が入れられていました。穴上にはセゴイタが乗せられ、その上に30cm位ノロアゲの泥を乗せ、稲を植えました。

ホッコミでの魚の捕り方はまず、ツキヤスやヨツデ、カキサデで魚を追い込んでから、トンネル入口の板間にノロを入れ逃げられないようにし、ホッコミの枝を除去し、ウツリで水を抜き、魚を捕りました。

キリコミはオトシから田んぼ側に入り込んだ短い堀や、串歯状の堀(クリーク)の一部区間に造られた魚などを捕るための施設です。ホッコミとの違いは天井がなく、施設的に大きいことです。

キリコミでの魚の捕り方は、まず、両端に杭を打ちその杭の内側にそれぞれヨシズを設置し、多量の枝を入れ魚の住家としました。フナやコイなどホッコミより大きい魚が捕れたようです。ツキヤス、カキサデで魚を捕り、さらに、投網でジビキするとほとんどの魚を捕ることができました。

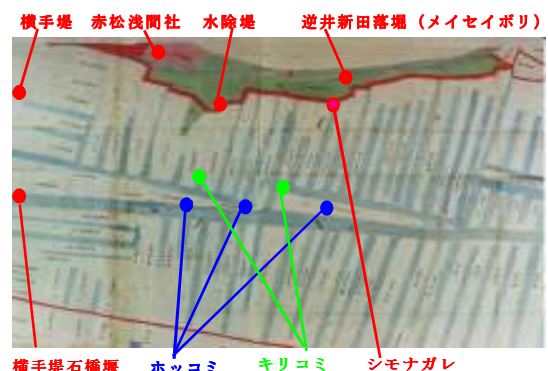
ホッコミやキリコミでの漁獵は、12月位に一度行うのが一般的ですが、2月頃にもう一度行うこともあったようです。このような施設以外では12月から2月にかけて、恒常的に魚捕りが行われていました。ツキヤスやカキサデで、ヨツデなどの網に追いこんだり、ギャマン(オキビン)やドカゴでの仕掛け、ツキヤスでホツツケの壁を突くこと、堀(クリーク)に手を入れ直接捕まえたり、針に小魚を付け一晩置くオキバリなど、魚捕りは冬の大事な仕事でもあり、楽しみの一つでもありました。



■ ホッコミの復元図



■ 四手網を使った魚釣り(昭和40年代)



■ ホッコミ・キリコミの位置

## ■ 笠原沼年表

西暦	年号	主な出来事
1625 頃	寛永 2 頃	大河内金兵衛により上の土手・下の土手を築き、さらに河原井沼悪水落堀を笠原沼へ掘り込む。百間村の用水源として道仏橋下に定堰を造り田んぼの開発を行う。沼の水量が増えたため、笠原沼周辺の田んぼが荒地となる
1656 頃	万治元頃	百間村と近所の村とで騎西領落堀堰論が起こる。
1672	寛文 1 2	騎西領と百間村に水争いが起こり、前の通り堰をすることを認められる。
1690	元禄 3	久米原・爪田ヶ谷村の者笠原沼に真菰等を植え出し秣場とし、その地も含め検地が行われる。
1693	元禄 6	西原・東・西・道仏村と爪田ヶ谷・久米原・須賀村とに水争いが起こる。
1708 頃	宝永 5 頃	笠原沼の周辺の秣場を田んぼに開発する。
1713	正徳 3	野牛高岩落堀が笠原沼に掘り込まれたことにより稲が水腐れとなり、訴訟を起こす。
1715	正徳 5	笠原沼の水が溢れ、蒔田だけでなく植田も水腐れとなり、笠原沼周辺の田んぼを秣場に戻して欲しいと訴える。
1722	享保 7	天領及び旗本池田氏の須賀村と旗本永井氏の須賀村で地先の争いが起こる。
1722	享保 7	道仏・東・西・百間村と久米原・爪田ヶ谷村とで用水堰論、道仏と蓮谷村との真菰刈り取り争いが起こる。
1724	享保 9	池田新兵衛により逆井新田の開発が行われ、逆井新田落堀を掘り笠原沼に水を落とす。
1728	享保 1 3	3 月、井沢弥惣兵衛により笠原沼新田の開発が行われる。河原井沼落堀、用水堀の普請が行われ、潰地を認めてもらう。
1728	享保 1 3	爪田ヶ谷落堀・野牛高岩落堀口から姫宮堀まで笠原付廻堀を新たに掘り、笠原沼に入る水を古利根川に落とす。
1728	享保 1 3	水除堤を造り、逆井落堀を笠原沼新田の縁に付け廻し笠原沼末に落とし込み、用排水とする。
1728	享保 1 3	中島村請新田内から百間村地内姫宮堀まで笠原沼落堀を新たに造る。笠原沼新田の中水道として笠原沼中堀が掘られる。
1729	享保 1 4	井沢弥惣兵衛掛で笠原沼落堀百間村地内落口から東村地内大落堀まで新堀を掘る。
1729	享保 1 4	2 月、河原井沼落堀の普請、野牛高岩落堀の切広を行い、10 月に潰地を認めてもらう。11 月、潰地の一覧を伊奈半左衛門に提出する。
1729	享保 1 4	8 月、逆井新田で検地が行われる。
1731	享保 1 6	3 月、掘付田堀敷の分 3 反 5 畝 14 歩半を書き上げる。5 月、旗本池田氏知行須賀村古田と笠原沼新田とで地境争いが起こる。
1734	享保 1 9	笠原沼新田で検地が行われる。
1745	延享 2	笠原沼新田の田堤が壊れ、水が漏れたため、人足を差し出す。
1750	寛延 3	6 月、笠原沼用水組合の村々は野牛村・高岩村の関枠の取り扱いを決める。
1762	宝暦 1 2	百間村古田の住民が京塚橋用水堀切り崩し笠原沼新田に溢れた水を流し込む。
1768	明和 5	笠原沼中堀・逆井新田落の件で訴訟が起こり、四ヶ村と七ヶ村の丁場が決まる。
1771	明和 8	笠原用水路第六天分水北側に関を造った事により、西・東村と百間村 3 組とで水争いが起こり取り決める。
1786	天明 6	第六天埋樋（伏樋）の普請をお願いする。
1811	文化 6	西条原分水堰の件で蓮谷・須賀・中島村等と西条原村とで争いが起こる。
1814	文化 9	2 月、西条原分水堰の件で蓮谷・須賀・中島村等と西条原村が取り決める。
1829	文政 1 2	笠原沼蓮谷・須賀・久米原・下野田・中島村新田と百間村 3 組が第六天下簷堰（第六天堰）の件で水争いが起こるが内済する。
1835	天保 6	中島村地内関枠の伏せ替えを行う。
1837	天保 8	小沼耕地用水掛渡井の普請が行われる。
1846	弘化 3	5 月、上野田村地内伏樋・掛渡井の普請が行われる。 9 月、笠原用水関枠の普請を願い出る。
1853	嘉永 6	3 月、上野田村地内掛渡井の普請が行われる。
1856	安政 3	中島村地内関枠の普請が行われる。
1859	安政 6	笠原用水路上野田伏樋樋の伏せ替えを願い出る。
1867	慶応 3	笠原沼代用水路上野田地内掛渡井の伏せ替えを行う。
1868	慶応 4	3 月、中島村地内堰枠の普請を願い出る。

## 展示品リスト (敬称略)

No.	資料名	所蔵者等	No.	資料名	所蔵者等
1	騎西領与百間村水論裁許状	折原静佑	47	堰板	森田留吉
2	騎西領落堀堰論裁許状	折原静佑	48	魚突券	戸田義一
3	用水溜沼論並 沼内眞菰刈敷出入裁許状	海老原正一郎	49	カキサデ	森田留吉
4	ため沼絵図	折原静佑	50	掛渡井図(算法地方大成巻4)	堀江清隆
5	地先出入訴状	戸田義一	51	騎西領掛用悪水関柵堀々古来覚書	加藤あさえ
6	笠原沼地先開発願	戸田義一	52	地籍簿 字笠原耕地	岩崎俊男
7	笠原沼古落堀浚願	戸田義一	53	地券	折原静佑
8	笠原沼蔦草植付願	戸田義一	54	ノロアゲジョレン	杉山ろく
9	柴山伏越絵図	埼玉県立博物館	55	ブッタテマンノウ	森田留吉
10	柴山伏越構造絵図(写真)	埼玉県立博物館	56	フリカケ	戸田義一
11	瓦葺掛渡井絵図(写真)	埼玉県立博物館	57	タカヤリ	戸田義一
12	瓦葺掛渡井構造絵図	埼玉県立博物館	58	ブックシ	戸田義一
13	十六間堰・八間堰絵図(写真)	埼玉県立博物館	59	石橋供養塔	山崎地区
14	西条原分水堰絵図	岩崎俊男	60	ホッコミ復元図	宮代町郷土資料館
15	用水悪水絵図	岩崎俊男	61	笠原沼新田村別図	宮代町郷土資料館
16	笠原新田割境絵図	戸田義一	62	見沼代用水路図	宮代町郷土資料館
17	御普請潰地御改帳	戸田義一	63	笠原周辺航空写真	宮代町郷土資料館
18	笠原沼新田・古田境取極	戸田義一	64	横手堤石橋の堰(写真)	宮代町郷土資料館
19	笠原沼中島村新田絵図	岩崎俊男	65	百間用水(写真)	宮代町郷土資料館
20	笠原沼中島村新田検地帳	岩崎俊男	66	内郷用水(写真)	宮代町郷土資料館
21	笠原沼久米原村新田検地帳	岡安邦彦	67	中須用水(写真)	宮代町郷土資料館
22	笠原沼須賀村新田明細帳	戸田義一	68	逆井新田落堀(写真)	宮代町郷土資料館
23	笠原沼下野田村新田明細帳	戸田義一	69	ヨツデを使った魚釣り(写真)	戸田義一
24	笠原沼西原組新田明細帳	新井隆夫	70	モンペ	中村ケエコ
25	笠原沼中島村新田明細帳	岩崎俊男	71	第六天堰(写真)	宮代町郷土資料館
26	新田絵図	岩崎俊男	72	第六天伏越(写真)	宮代町郷土資料館
27	笠原沼新田絵図	岩崎俊男	73	笠原沼落堀(写真)	宮代町郷土資料館
28	逆井新田絵図	岩崎俊男	74	中水道(写真)	宮代町郷土資料館
29	第六天埋樋御普請願絵図	岩崎俊男	75	姫宮落堀(写真)	宮代町郷土資料館
30	笠原用水路伏越樋伏替願	折原静佑	76	水除堤(写真)	宮代町郷土資料館
31	中島村地内堰柵普請願	岩崎俊男	77	堂沼田んぼのクロ(写真)	戸田義一
32	田方植付証文	岩崎俊男	78	上野田伏越(写真)	宮代町郷土資料館
33	地籍図字笠原 百間7村分(写真)	宮代町役場	79	上野田掛渡井(写真)	宮代町郷土資料館
34	地籍図字笠原 須賀村分(写真)	宮代町役場	80	上の土手(写真)	宮代町郷土資料館
35	地籍図字笠原 下野田村分(写真)	宮代町役場	81	笠原沼のホツツケ	宮代町郷土資料館
36	地籍図字笠原 東条原村分(写真)	宮代町役場	82	堂沼のホツツケ	宮代町郷土資料館
37	地籍図字堂沼(写真)	宮代町役場	83	笠原沼田んぼでの漁獵の様子	宮代町郷土資料館
38	笠原沼新田作付地届	戸田義一	84	ノロアゲの様子	宮代町郷土資料館
39	水路図	戸田義一	85	笠原沼大落粕壁赤沼間藻刈雑費帳	戸田義一
40	見沼土地改良区の概況(写真)	戸田義一	86	笠原沼基金物品記録帳	戸田義一
41	ノロアゲジョレン	森田留吉	87	笠原中落特別浚渫費	戸田義一
42	スキ	青木千代子	88	マエカケ	中村忠男
43	ツキヤス	森田留吉	90	ジュバン	八潮市立資料館
44	ツキヤス	戸田義一	91	オビ	八潮市立資料館
45	モモヒキ	森近司	92	ノラジュバン	中村ケエコ
46	タコスリ	戸田義一	93	ツキヤス	青木千代子